

## 常識

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 梅野 博仁

世の中の常識は時代によって変化する。例を挙げると、手術前の手洗いがある。私が入局した頃は、硬いブラシで皮膚が赤くなるまでゴシゴシと2～3分洗うよう指導された。それが嫌で外科医の道を断念した学生も居たかもしれない。最近では皮膚に雑菌繁殖の恐れがあり、簡単な洗浄が推奨されている。お風呂でも硬めのナイロン製タオルで皮膚をゴシゴシこすって垢と角質層を落としすぎるのは美容上、皮膚によくないと認識されてきた。垢すりを生業としている多くの韓国の業界人にとっては死活問題であろう。美肌で有名な？タレントのタモリさんは20年以上、石けんも使わずお湯につかるかシャワーを浴びるだけの生活をされていると聞く。また、術後創部のガーゼ交換は日曜祭日を問わず、毎日行ってきたものだが、最近では創部に滲出液がにじんだまま湿潤な状態を保持する方が創傷治癒によいとされている。小児の食物アレルギーに関する考え方も変化がみられる。以前はアレルギーの原因物質は食さないよう指導されていたが、最近は食して治そうという考えに変わってきたようだ。食物といえば牛乳の飲み過ぎは身体によくないとの考えもある。日本人が1年間に飲む牛乳は1人平均約35リットル。デンマークやオランダなどは優に100リットルを超える。チーズなど乳製品を含めると、その差は4倍前後にもなる。しかし、高齢者の大腿骨頸部の骨折率は北欧諸国の方が日本より高い。このため「牛乳は防止策にならない」との指摘がある。しかし、日光を浴びる時間が北欧と日本では異なる。日光浴でビタミンDを産生する機会が減る北欧と日本を比較すること自体がナンセンスなのかもしれない。今までの常識の中には慣習で信じられてきただけで、科学的な根拠を欠くものがあると思ってよいし、時には常識を疑うことも必要であろう。基礎や臨床医学においても常識を疑う目が必要である。今までの定説を鵜呑みにしてはならない。本当にそうだろうか？根拠は果たして正しいのだろうか？常識を疑う目を持てば、目から鱗が落ちる経験ができるかもしれない。医師になってからの勉強は学生時代の勉強とは根本的に異なる。学生時代の勉強はすでに判明したことを疑うことなく、短時間で要領よく理解して覚える能力が要求される。しかし、医師になってからの勉強はそれに加えて、判らないことへの探求、つまりは研究の要素が増えるのである。研究機関である大学病院での臨床は常に進歩が要求される。よりよい研究を行うには常識を疑う目も必要であろう。